

西夏語・漢語対照研究

— 「大方廣佛華嚴經」における
「あらゆる」を意味する語彙について —

小 高 裕 次

1. 序論

1. 1. 目的

十世紀から十三世紀まで中国の河西走廊に存在した西夏国の主要民族である党項（タングート）人は、敬虔な仏教徒であった。西夏国の政府には和尚功德司・出家功德司・求法功德司といった役所が設けられ、大量の漢語仏典が西夏語に翻訳された。また、西夏国滅亡後も、元王朝による仏教を用いた被征服民族の宥和政策という後押しもあって、党項人による仏典の西夏語訳は続けられた。

本稿で使用するテキスト『大方廣佛華嚴經（以下『華嚴經』と呼ぶ）』は、元朝時代に漢語から西夏語に翻訳されたもので、「云わば漢文の文章を模倣した擬漢文體であり、むしろ多くの場合、漢文を單に逐字的に置き換えただけの文章であるとさえ云える（西田 1975:24）」ほど漢文との規則的対応が見られる文献である。しかし、仔細に見ていくと、漢語と西夏語の間の対応関係にゆれの見られる部分もある。

本稿は、西夏文および漢文『華嚴經』における、「あらゆる」にあたる意味を持つ形態素について、その対応関係を明らかにすることを目的とする。また、漢文『華嚴經』を手掛かりに、西夏語の諸形態素の意味の違いについて考察する。

1. 2. 使用する文献

本稿では、資料として、いわゆる『八十華嚴』を使用する。

漢文『華嚴經』は、唐の則天武後の時代に于闐国の實叉難陀三蔵によって翻訳されたものである。底本として、『大正新脩大藏經』を用いる。

また、西夏文『華嚴經』は、西田(1975)所収の華嚴經を底本として用いる。先述の通り、元朝時代に漢語から西夏語に翻訳されたもので、木活字本である。

比較の対象としたのは、第一卷～第三卷（世主妙嚴品第一之一～三）である。

また、日本語訳は、『國譯一切經』に依っている。

1. 3. 研究方法

西夏文『華嚴經』から、「あらゆる」という意味を持つ形態素「𐽀 ʒif¹²」「𐽁 ni」「𐽂 tofi」を含む文を取り出し、漢文『華嚴經』と比較した。

西夏語のそれぞれの形態素については、Кепинг(1985)・林(1994)・李(1997)の分析がある。

Кепинг(1985)は、𐰚𐰆 *ziŋ* および 𐰚𐰆𐰚 *toŋ ziŋ* を「代名詞の意味を持つ副詞」と位置づけている。

林(1994)では、西夏語訳『孫子』において 𐰚 *ni* は「進」「著」と、𐰚 *ziŋ* は「悉」「皆」「盡」「齊」「俱」と、𐰚 *toŋ* は「皆」と対応し²⁾、また、𐰚𐰆𐰚 *toŋ ziŋ* の形で「盡皆」と対応すると述べている。

また、李(1997)は、𐰚 *ni* は動詞としては漢語「至」「到」「普」「遍」、その他「周」「上」「臨」「及」「均」にあたり、𐰚 *ziŋ* は副詞で「皆」「咸」「俱」「普」「悉」「總」「極」「周」「競」にあたり、𐰚 *toŋ* は形容詞で「皆」「悉」「盡」「總」にあたると述べている。

この他、西夏語には、同様の意味を持つ「𐰚𐰚 *ndiuf ndiuf*」、「𐰚𐰚 *gor gor*」という形態素もあるが、上の三つの形態素と比較して規則的な対応関係(「𐰚𐰚 *ndiuf ndiuf*」は漢語「所有」に対応、「𐰚𐰚 *gor gor*」は漢語「一切」に対応)をもっているため、本稿では取り扱わない。

2. 本論

2. 1. 実際の対応関係

テキストにおける各形態素の使用数は、𐰚 *ni* が245例、𐰚 *ziŋ* が322例、𐰚 *toŋ* が18例であった。テキストの総字数がおよそ17,000字であるから、𐰚 *ni* および 𐰚 *ziŋ* はかなりの頻度で使われる形態素だといえる。

テキストにおける使用例から、それぞれの形態素をいくつかに分類した。まず、𐰚 *ni* は副詞的用法・形容詞的用法・動詞的用法に区分した。また、𐰚 *toŋ* が必ず 𐰚𐰆𐰚 *toŋ ziŋ* の形で用いられ、単独で現れることはなかったため、𐰚 *ziŋ* は単独の用例と𐰚𐰆𐰚 *toŋ ziŋ* の用例とに区分した。また、𐰚 *ni* と 𐰚 *ziŋ* が 𐰚𐰆𐰚 *ziŋ ni* の形で用いられる例もあった。そのため、これらは 𐰚 *ni*・𐰚 *ziŋ* 単独の用例とは別に項目を設けた。また、後述するように、𐰚 *ni* は 𐰚𐰚 *ni suŋ*・𐰚𐰚 *rir ni* という熟語の形で漢文と対応している例があり、これらも 𐰚 *ni* 単独の用例とは別に項目を設けた。

教典中におけるそれぞれの用例数を次頁の表で示す。

1) 西夏語の音声表記は西田(1989, 1997)・荒川(1997)に従う。

2) 林女史は 𐰚 *toŋ* が単独で用いられて漢語「皆」に対応する述べておられるが、原典のコピーを見るかぎり 𐰚 *ziŋ* の誤認ではないかと思われる。

表.

[illegible]

2. 1. 1. 西夏語から見た漢語との対応関係

西夏語の各形態素と漢語との対応関係は、以下のものであった。

2. 1. 1. 1. 徧 *ni*

本来、徧 *ni* は移動動詞である。漢語動詞「徧」「周」「及」「到」「至」「布」「暨」および「普遍」「周遍」に対応していた。

(1) 徧群 舒服 徧徧 徧 (II, 8, 21) ³⁰

衆生 調伏する 十方 *ni*

調伏衆生徧十方

衆生を調伏して十方に徧く

(2) 徧群 徧群 徧徧 徧 (II, 16, 09)

衆心 *ni* 応じる NEG-*ni* 無い

普應群心靡不徧

普く群心に應じて周からざることなく

(3) 徧群 徧群 徧徧 徧 (II, 15, 16)

光明 照耀 NEG-*ni* 無い

光明照耀靡不及

光明照耀して及ばざることなし

(4) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧徧 徧徧 徧 (I, 04, 13)

これ 随う PERF-行く 円満 得る 彼岸-CM *ni*

随願所行。已得圓滿到於彼岸。

願に随つて行ずる所は已に圓滿なることを得て彼岸に到り。

(5) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧 (II, 17, 24)

徧 修行する CAUS 果-CM *ni*

悉使修行至於果

悉く修行して果に至らしむ

(6) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧徧 (I, 06, 14)

垂徧 *ni* 焰 藏 主林神

垂布焰藏主林神。

垂布焰藏主林神。

(7) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧徧 (III, 06, 17)

徧 音 *ni* 辺 衆苦 滅する

其聲所暨衆苦滅

其の聲の暨(およ)ぶ所は衆苦を滅す

(8) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧徧 徧徧 徧徧 徧徧 (I, 02, 12)

徧 虚空 如く 一切 徧 *ni* 諸国 内 平等 随う 入る

又如虚空普遍一切。於諸國土。平等隨入。

又虚空の普く一切に徧じて諸の國土に於て平等に、随つて入るが如し。

(9) 徧群 徧群 徧徧 徧徧 徧徧 (II, 13, 02)

法界 一切 徧 徧 *ni*

一切法界皆周徧

一切法界皆周徧

3) 略語一覧 CAUS=使役, CM=格標識, NEG=否定詞, NOMZ=名詞化詞, PREF=完了接頭辞

次の例は、**𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺** **𐰽** という文字の連続が見られるが、**𐰇𐰺** + **𐰇𐰺𐰽** **𐰽** **𐰽𐰺𐰽** (いたりいく) であると考えられるため、**𐰇𐰺** - 「普」の項目と **𐰇𐰺** **𐰽** - 「運」との項目に振り分けた。

(10) **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺** **𐰇𐰺𐰽** **𐰽𐰺𐰽** (II, 17, 01)

光明 **𐰇𐰺** **𐰽** 巡る 天子

普運行光明天子

普運行光明天子。

𐰇𐰺 **𐰽** が副詞的あるいは形容詞的に用いられるのは、仏典に特有の用法である。**𐰇𐰺** **𐰽** は漢語の「普」「遍」「周」「布」に対応して動詞句を修飾し、「普」に対応して名詞句を修飾していた。

副詞的用法：

(11) **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (華 II, 12, 05)

善目天王 衆生界 一切 **𐰽** 浄め 解脱門 得る

善目天王。得普浄一切衆生界解脱門。

善目天王は普く一切の衆生界を浄むる解脱門を得、

(12) **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (II, 09, 16)

爾時 自在天王 仏威力 随う 自在天衆 一切-CM **𐰽** 観ずる 頌言 PREF-説く

爾時自在天王。承佛威神。遍観一切自在天衆。而説頌言

爾の時に自在天王は佛の威神を承けて遍く一切の自在天の衆を観じて頌を説きて言はく、

(13) 皆 **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (I, 11, 07)

𐰇𐰺 勤力-CM 雲 起こす **𐰽** 雨ふす 諸衆生-CM 熱悩 滅する CAUS

莫不勤力。興雲布雨。令諸衆生熱悩消滅

勤めて雲を興し雨を布きて諸衆生をして熱悩を消滅せしめざるものはなし。

形容詞的用法：

(14) **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (II, 03, 09)

普智眼皇王 **𐰽** 門 入る 法界 觀察する 解脱門 得る

普智眼天王。得入普門觀察法界解脱門。

普智眼天王は普門に入りて法界を観察する解脱門を得、

2. 1. 1. 2. **𐰇𐰺** **𐰽**

西夏語 **𐰇𐰺** **𐰽** は、ともに名詞的にも副詞的にも用いられる。しかし、以下のように名詞的用法と副詞的用法の典型的な例を指摘することはできるものの、どちらとも解釈できる例も多いため、あえて品詞の違いによる分類は行なわなかった。

名詞的用法

(15) **𐰇𐰺** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (I, 3, 13)

𐰇𐰺 如来-CM 善海 随う 生れる

皆從如來善根海生。

皆如來の善根海より生じ、

副詞的用法

(16) **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** **𐰇𐰺𐰽** (II, 04, 01)

仏 神通 力 **𐰇𐰺** 現れる 能う

佛神通力皆能現

佛は神通の力にて皆よく現じたまひ

廳 *ziŋ* は漢語「普」「皆」「咸」「總」「悉」「遍」「周」「具」に対応していた。
上の例で挙げた「皆」以外の形態素との対応例を下に示す。

「普」「悉」との対応例は、上記の「皆」との対応例とともに頻繁に見られた。

- (17) 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 廳 𪛗𪛗 (Ⅲ, 09, 13)

光明 十方-CM *ziŋ* 照す

光明普照於十方

光明は普く十方を照らす

- (18) 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 (Ⅰ, 03, 22)

世法 行く-NOMZ それ 事 *ziŋ* 同じ

世法所行。悉同其事。

世法の行ずる所は悉く其事に同じ、

「咸」は、江戸時代の漢学者伊藤東涯(1670-1736)の語学書『操觚字訣』に「古字ナリ」という記述が見られる。文語的な語彙であったためか、一例を除いて全て韻文中で用いられ、廳 *ziŋ* と対応していた。

- (19) 𪛗𪛗 𪛗𪛗 廳 𪛗𪛗 (Ⅲ, 11, 06)

世間 一切 *ziŋ* 救護す

一切世間咸救護

一切世間を咸く救護す

「總」は必ず「總持」の形で用いられ、西夏語 廳𪛗 *ziŋ* ʔYeŋ に訳されていた。

- (20) 廳 𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗 (Ⅰ, 03, 22)

ziŋ 持つ 広大衆法海 集まる

總持廣大。集衆法海。

廣大の集衆法海を總持し、

「遍」「周」「具」が 廳 *ziŋ* に訳されている例はそれぞれ一例ずつ見られた。

- (21) 𪛗𪛗 𪛗𪛗 廳 𪛗𪛗 𪛗𪛗 (Ⅰ, 14, 02)

nt 音 *ziŋ* 照 天王

普音遍照天王。

普音遍照天王。

- (22) 廳 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 (Ⅰ, 08, 20)

ziŋ 行く NEG 碍 主方神

周行不礙主方神

周行不礙主方神

- (23) 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 廳 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 (Ⅰ, 02, 11)

譬え 如く 虚空 衆像 *ziŋ* 含む 諸境界-CM 分別する-NOMZ 無い

譬如虚空具衆像含。於諸境界無所分別

譬へば虚空の具(つぶ)さに衆像を含みて諸の境界に於て分別する所無きが如く、

また、西夏文では廳が用いられているが、漢文には対応する語が無い例もあった。

- (24) 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 廳 𪛗𪛗 (華Ⅱ, 07, 10)

如来 神變 無量門 一念 一切処 *ziŋ* 現はる

如來神變無量門 一念現於一切處

如來の神變無量の門あり 一念に一切の處に現じて

上の例は七音節の韻律を守るため、漢文にはない 𪛗 ziŋ が挿入されている。

- (25) 𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗 (華 I, 11, 06)

ziŋ 勤力-CM 雲 起 ni 雨降 ni 諸衆生-CM 熱惱 滅 ni CAUS

莫不勤力。興雲布雨。令諸衆生熱惱消滅

勤めて雲を興し雨を布きて、諸諸の衆生をして熱惱を消滅せしめざるものなし

これは漢文の二重否定が 𪛗 ziŋ に置き換えられている。やはり四音節の韻律を守るためであろう。

- (26) 𪛗 𪛗𪛗 𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 (華 II, 14, 21)

仏 色身 ziŋ 清淨 廣大 世間 比 ni 無 ni CAUS 能 ni 解脱門 得 ni

得能令佛色身最清淨廣大世無能比解脱門。

能く佛の色身をして最も清淨廣大ならしめて世に能く比するもの無き解脱門を得、

この例は、発音が同じで字形のよく似た 𪛗 ziŋ「最も」の誤記であろう。

2. 1. 1. 3. 𪛗𪛗 toŋ ziŋ

𪛗𪛗 toŋ ziŋ は漢語「皆」「悉」「悉皆」「皆悉」に対応していた。漢語「皆悉」と対応していた (30) を除いて、全て韻文中で用いられていた。

- (27) 𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗 (I, 12, 03)

toŋ ziŋ 勤-CM 衆生 心寶 顯 ni 起 ni

皆勤顯發衆生心寶

皆勤めて衆生の心寶を顯發す。

- (28) 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 (II, 01, 12)

toŋ ziŋ 方便願海 間 PERF-入 ni

悉已入於方便願海。

悉く已に方便願海にはいり、

- (29) 𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 (I, 02, 09)

智 三世 入 toŋ ziŋ 平等

智入三世悉皆平等。

智は三世に入りて悉く皆平等に、

- (30) …𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 (II, 06, 09)

…成住壞 世間 一切 toŋ ziŋ 虚空 如く 清淨 CAUS 解脱門 得 ni

…得普使成住壞一切世間皆悉如虚空清淨解脱門。

…普く成住壞の一切の世間をして皆悉く虚空の如く清淨ならしむる解脱門を得、

最後の例文では、漢文の字数にあわせるために 𪛗𪛗 toŋ ziŋ が用いられたのだろう。ただし、西夏文の方は 𪛗𪛗 toŋ ziŋ とはなっていない。

2. 1. 1. 4. 𪛗𪛗 ziŋ ni

𪛗𪛗 ziŋ ni は直訳すれば「あまねくいたって」となる。漢語「普遍」「遍周」「周遍」に対応していた。

- (31) 𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗𪛗 𪛗𪛗𪛗 (II, 17, 13)

十方 諸国土 ziŋ ni

普遍十方諸国土

普く十方の諸国土に遍じて

(32) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (I, 02, 15)

辺 無い 色相 円満 光明 法界 𐰇𐰆 ni

無邊色相。圓滿光明。遍周法界。

無邊の色相圓滿にして光明は法界に遍周し、

(33) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (II, 09, 19)

仏身 𐰇𐰆 ni 法界 等しい

佛身周遍等法界

佛身は周遍して法界に等しく

2. 1. 1. 5. 𐰇𐰆 ni sufi

𐰇𐰆 ni sufi は西夏語を直訳すると「あまねくみちる」となる。漢語「充遍」「充滿」「遍満」に対応していた。「充遍」「遍満」との対応関係はほぼ直訳と言えるが、「充滿」の訳に用いたのは、意識と言えよう。

(34) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (I, 01, 18)

如来 住む-NOMZ 宮殿 樓閣 広博 嚴麗 十方 ni sufi

如來所處宮殿樓閣。廣博嚴麗。充遍十方。

如來の處したまひし所の宮殿樓閣は廣博嚴麗にして、克く十方に遍く、

(35) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (I, 2, 10)

れ 身 世間 一切 ni sufi

其身充滿一切世間。

其の身は一切の世間に充滿し、

(37) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (II, 01, 05)

辺 無い 品類 諸諸 ni sufi

無邊品類。周匝遍満。

無邊の品類は周匝し遍満して、

2. 1. 1. 6. 𐰇𐰆 rir ni

𐰇𐰆 rir ni は西夏語を文字通りに訳すと「いたった」「いたって」となる。「乃至」に対応していた。

(38) 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 (II, 16, 07)

も 如来-CM 少徳 念 rir ni 一念 心 專仰す

若念如來少功德 乃至一念心專仰

若し如來の少功德を念じ乃至一念も心に專仰すれば

2. 1. 2. 漢語から見た西夏語の対応

漢語の諸形態素と西夏語との関係は、a) 対応する形態素が決まっているもの・b) おおむね一つの形態素と対応するが、若干の例外を持つもの・c) 複雑な対応関係を見せるもの、の三つに分けられる。それぞれの特徴的な例を下に挙げる。

a) 「至」「到」「暨」－ 𐰇𐰆 ni、「咸」「總」「充遍」「遍満」－ 𐰇𐰆 𐰇𐰆、

「皆悉」「悉皆」－ 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆 𐰇𐰆、「乃至」－ 𐰇𐰆 rir ni

b) 「皆」「悉」－ 𐰇𐰆 𐰇𐰆、「遍」「周」－ 𐰇𐰆 ni、「普遍」－ 𐰇𐰆 𐰇𐰆 ni

c) 「普」－ 𐰇𐰆 ni・𐰇𐰆 𐰇𐰆

2. 2. 傾向

西夏語と漢語の諸形態素の対応関係には、次のような傾向が見られる。

𐽀 ṣif・𐽁 nt・𐽂 tof のどの形態素をとってみても、完全に一対一の対応になっているわけではなく、対応する漢語の方が多い。これは、漢語の方が「あらゆる」という意味を持つ語彙が豊富なためであろう。

漢語の動詞との対応は 𐽁 nt のみ見られ、𐽀 ṣif 𐽂𐽂 tof ṣif には見られない。逆に、漢語の名詞との対応は 𐽀 ṣif 𐽂𐽂 tof ṣif には見られるが 𐽁 nt には見られない。これは 𐽁 nt が本来は移動動詞であることと深く関係があると思われる。

𐽂𐽂 tof ṣif は韻文中に多く見られた。ここには、漢文との音韻数をあわせるための西夏人の工夫が見て取れる。

漢語の諸形態素の中で、「普」のみが 𐽁 nt との対応例数と 𐽀 ṣif とのそれが拮抗していた。その中で、神名に用いられた「普」は 𐽁 nt と対応する例が多く見られた。また、韻文中で副詞的に用いられる「普」は 𐽀 ṣif で訳される例が多く、𐽁 nt は 𐽂 ṣīa「現われる」・𐽃 ndžɛ「行く」など特定の動詞としか結びつかなかった。

その他、本稿では詳細な例を挙げることはできなかったが、漢語「及」や「布」等の多義語は、その意味によって細かく訳し分けられていた。

3. 結論

「あらゆる」という語彙をみる限り、漢文と西夏語訳との間には、多対多の対応が見られると言っていいだろう。そして、その最大の理由は韻律の維持にある。仏教教典という口誦を前提とした文献であるため、四音節（偈言では七音節または五音節）を基本とした漢語仏典のリズムを崩さないようにしたのである。

西夏語 𐽁 nt・𐽀 ṣif の持つ意味の差異については、現時点では次のように結論付けたい。

𐽁 nt - あまねく。原義が「いたる」であることから想像できるように、行為が全体にゆきわたる、という点に重点が置かれている。

𐽀 ṣif - すべて。みな。動作の主体あるいはその対象ひとつひとつに対する意識が働いている。

𐽂 tof に関しては、𐽂𐽂 tof ṣif と 𐽀 ṣif との明確な差異について、本研究では残念ながら明らかにすることはできなかった。𐽂 tof は単独での用例が一つも見られないところから、自立形態素ではないと思われる。しかし、𐽀 ṣif 以外の形態素と結合する例も見られないので、接頭辞とは言いがたい。形態素 𐽂 tof は、「みな」という意味を持つ語基(radical)であると考えたい。

参考文献

- 荒川慎太郎 (1997) ; 『西夏語通韻字典』 (京都大学 修士論文参考資料)
- 大藏經刊行会 (1970) ; 『大正新脩大藏經 大10卷 華嚴部 下』, 大藏出版, 東京
- 岩野真雄 編輯 (1988) ; 『國譯一切經: 華嚴部』 1-4, 大東出版社, 東京
- Кепинг, К. Б. (1985) ; *Тангутский Язык, Морфология*, Наука, Москва
- 李範文 (1997) ; 『夏漢字典』, 中国社会科学出版社, 北京
- 林英津 (1994) ; 『夏譯《孫子兵法》研究』 上下, 中央研究院歷史語言研究所, 台北
- 中村元 (1981) ; 『佛教用語大辭典』 縮刷版, 東京書籍, 東京
- 西田龍雄 (1975, 1976, 1977) ; 『西夏文華嚴經』 I II III, 京都大学文学部, 京都
- (1989) ; 「西夏語」 『言語学大辞典』 中巻, 三省堂, 東京
- (1997) ; 「西夏語の構造と系統」 『西夏王国の言語と文化』, 岩波書店, 東京
- 小川環樹・西田太一郎・赤塚忠 編 (1968初版、1984第205版) ; 『新字源』, 角川書店, 東京
- 史金波 (1988) ; 『西夏佛教史略』, 寧夏人民出版社, 銀川
- 吉川幸次郎・小島憲之・戸川芳郎 編 (1979-1980) ; 『漢語文典叢書』 第一巻～第六巻, 汲古書院, 東京